

■ フォト・エッセイ ■

# 北京の街角から

写真・文

今岡昌子

Masako Imaoka



「天壇」にある本祈念殿は、現存する中国最大の祭壇で、世界遺産に登録されている。北京市のシンボルのひとつ

今年の初め、北京空港から一路、市内へと向かった。整備された高速道路は、町の電飾に照らされる夜、いつそう華やいてい  
る。大都会の合間をぐんぐん掻き分けると、  
立ち並ぶ新しいビル群。新宿の高層ビル街  
が至るところで乱立しているように見え、  
建設ラッシュの凄まじさに驚かされた。一  
年どころか数カ月の経過で、「浦島太郎」  
になってしまいそうだ。

朝陽区にある中国中央電視台の新しいビ  
ルなど、奇想天外の設計デザイン。街の広  
告看板ひとつ取っても、赤を基調とするデ  
ザインの豊富さに加えて、中国の独特さ  
があるようで面白い。視覚に入るものすべて  
も刺激的と思えるほど、北京市によりこ  
ちらも満ち溢れる。出会う人々と町並み。フォ  
トグラファーである私にどんな第一印象を  
もたらしてくれるのか。オリンピックを控  
えたこの街を知るには、まずは車窓から  
と思っていた。流れる目の景色が瞬時に  
消えるとき、果たしてどのような画像が記  
憶として残るのか。その印象から本質的な  
断片を探せたら、と懸命に見つめていたの  
だが…。

空港バスから降りるとき、私は突如リキ  
シャの運転手に取り囲まれた。客取りの競  
り合いの真ん中に立たされており、耳がキ  
ンキンする程に激しかった。だから、そう  
した商売人たちの群れから逃れたくなり、  
流しのタクシーを停めて、慌ててその車に



北京空港から車で市内へと向かう。その道は高速道路により整備されている

乗り込んだ。

「急いで、灯市口まで行ってください」。運転手に救出されるようにその場を立ち去った。こんなときは決まって、運転手の親切心に触れることが多い。

「あなたはどこから来たの」。

中国語で、気さくに話しかけられているようだが、私の場合、通訳者を介した会話である。運転手は素朴に思うことを語るの、こちらも道など尋ねて、やりとりを続けると良い反応が続いて、気分がいい。

あるとき、同行者の中国人が運転手と生まれ故郷が偶然同じとわかった。中国とはいえ広いから、ふたりはお互いに嬉しかったらしい。会話はローカルな話で、数分も話すと意気投合。都会とは思えない人肌の温かさに微笑ましく思った。

さらに面白いのは、タクシーという小さくて温かな密室の背景に、あの巨大な高層ビル群が存在しているということ。対比だ。北京の町は、近代的なコンクリート建築の外観に変貌を遂げているが、人々にどこか長屋感覚があるように思えてならない。

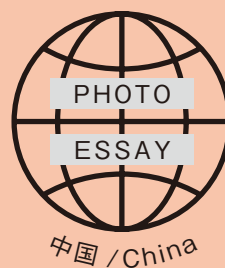
「実家は農家で、幼い頃の私は貧しかった。両親は私の学費を捻出するため、相当苦労して働いた。両親に楽をさせてやりたい」。

地方出身の二〇代の男性はそう語っていた。見かけのファッションはカジュアル系で、一見、日本のジーンズ姿の若者と大差はないが、精神面は日本でいうと時代を

北京市のスタンドショップでは、風変わりな串焼きを取り扱う



北京市の中心地近くの川で泳ぐ人たち



北京市内には高層ビルがたくさん建ち並んでいる

遡ったような印象にも映る。こうしたギャップ感こそが、北京らしく（あるいは中国らしく）思えた。

らしさ、といえば、北京ではバスの座席チケットを確保するにもホテルをチェックインするにも、何事においても列を成すのが付きものだ。人々は手続きを踏むため、ある場所に殺到しており、その周囲はいつも過剰なエネルギーに満ちている。私はどういうわけかいつも誰かに順番を割り込まれてしまう。英語で物事を伝えようとするときなど、言葉が通じないことから後回しにされる。

「どうしたらこの種の生存競争にて、生き残れるのだろう」という思いがあり、私は周囲の人々を観察した。

チケットを買うときに学んだのは、係員と目配せをし、チケットを持つ手を係員の前に出して、自分の存在感を示して待つことだった。毎日、エネルギーをぶつけられることを日常茶飯事としている係員に、静かに迫ることが時々有効だとわかった。だが、知人の中国人にはこう窘められた。「甘いですよ、たくましく参入しないと」。

北京には、ある部分においては東京を越えた利便性がある。だが、あるときのあるタイミングで、突如幕引きとなることが少なくはない。システムは、経済的あるいは何らかの要因で不安定となりやすいのかもしれない。「我先に」精神は、そんな一種



火鍋の店が建ち並ぶ場所では、その一帯が赤い電飾の光に包まれていた

の不安感のような曖昧な心理を表すのだろうか。北京でなくても世界は年々激動しており、いつどこでどうなるか、誰にもわからない、という気がする。

「北京の銀座通り」と呼ばれる王府井。あるとき夜市へと出かけてみた。蜂の子、蟬の幼虫、ムカデ、サソリ、ザリガニ、ヒトデなど。いわゆるゲテモノの串焼きを取り扱うスタンドショップが、軒を連ねている。これらは主に油で揚げて食する。どんな勇者が試すのか、眺めるのが楽しい。だが、自ら試すとなると、躊躇った。

北京市では、さまざまな好奇心に駆られる。いい方向性に向かつて生まれ変わりたい、という願望があり、異なる価値観を受け入れることを心がける。だが、私の育った環境と折り合いのつかない場合があることも確かである。

それは中国を撮るときにもいえること。中国人の目と日本人としての目が、どのように融合していくか。客観性と主体性がどのように折り重なるか…。

人口一六三六万人の北京市には、様々な民族が寄り集まっている。それは先鋭化する現代的な中国そのもの。吸収しきれぬ程の溢れる刺激と躍動感に満ち溢れている。そうした生命力に焦点を当てることで、私にも何らかのプリミティブな強さが呼び起こされるかのように思えた…。

(いまおか ままこ／フォトグラファー)